化の初まりの太古の時代をも連想させる。人生において芸術心はまことに重大なものだが、一歳ごろから二、三歳ごろの子どもの自然とのふれ合いの中に、大きな力が秘められている。そういう時の保育者（母もしくはそれに代る人）の心情や子どもの扱い方がまたきわめて重要なことなのである。

このごろの世の中は、右のようなことに無感覚で無惨に子どもから奪ってしまっている。ほんとう心ないことだ。そして母も保育者もそれに狎れてしまっている。子どもから自然や遊びを奪うことは、結局人間性をこわしてしまうことになる。子どもの心の感動やリズムをそこなってしまうからである。このごろの保育は、そういう子どもの心を大事に保ち育てていくことでなく、何かの中に捕へこみ押しこんでしまう捕育に堕している。したがって教育も、教え育てることでなく狂育になってしまっているのではないかと思う。

さて、倉橋先生の「幼児保育の芸術性」を読みかえして新しい感動を覚える。そこにはほんとうの幼児保育の真諦が美しく述べられている。保育は大人の思い通りに捕育したり単に保護したりすることでない。幼児の育つ力から発するリズムを育てること、つまり芸術性によるものだという。そしてそれは愛ということで、〝愛こそ最も高貴な、美しい人間芸術なのである〟〝芸術性のない保育のなんと幼児につまらない不幸なことであろう〟といわれる。

私もこのごろしみじみ思う。真の保育は子どもの本性のリズムと感動をひき出す芸術にほかならない。そして感動とリズムをもって幼児に接する保育者と幼子とのいきいきした出会いの中に、子どもはすくすく育っていく。そのこと自体が何ものにもまさる芸術なのだ。

川崎　千束

子どもの心は常に動いている。

動いているからこそ、ときとすると、あるものに向かって、ひたむきになれるのである。

平安の昔でも、さすがに清少納言は、この子どもの心理を次のように描写している。

二つ三つばかりなるちごの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵ありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらえて、大人などに見せたる、いとうつくし。

今も昔も、子どもの本源の心理は変わらないのであろうが、子どもの心をどう捉え、どう扱っていくかが、現代的な解釈（かいしゃく）とし

て、重要な課題となってくる。

子どもの動く心に、大人が波長を合わせての日常生活があり、ときとして、子どもが、ひたむきな激しさをもって向かったものに、共に燃え、その双方のあい合う波長と熱気によって、子どもたちの一コマ一コマの生の歴史がつくられていく――そんなものを保育の芸術性と私はいいたい。

大人の心はややもすると沈滞し、その沈滞したものが、教育というわく組みの中に逃げこんで、身辺のものにたえず心を動かして活動する子を〝落付きのない子〟ときめつけ、ひたむきな情熱を〝しつけ〟という名で弱らせてしまう。残るものは、大人のご都合主義によって立てられた教育目標の形骸だけになるであろう。このような心の衰えてしまった保育者には保育の芸術性は望むべくもない。

倉橋先生は、幼児保育の芸術性の章にこう記されている。

教育の理想は、目的と方法だけでは、一人の幼児をも抱くことはできないし、幼児を親しませることも出来ない。（中略）

保育者の心を衰えさせず、いつも心を柔らかくし、子どもの心にかちんかちんと響き合う弾力あるものにしておくには、まず〝教育〟の概念から離れること、これが第一義である。

子どもと一緒に砂のお団子を握り、子どもと一緒にかけ出す。そうすることによって子どもの心の弾力が保育者にも伝わってくる。象のギニョールの動かし方を工夫しながら、子どもたちの演ずるさるの役の言葉に応じることによって、保育者の心は若やぐ。ころんだ、ぶたれた、あれが欲しい、と流す涙、それらの子どものかなしみの涙を知ることによって、子どもの幸福というものが理解されてくる。子どもと一緒に、ジャングルジムに登り、鬼ごっこをしながら、ふと仰ぐ雲、それによって想像力の涸渇から救われるのである。

十月の風の朝には、学園の構内に椎の実が数多くこぼれ落ちる。それを拾い集めるのが子どもたちの秋の朝の楽しみである。

〝どんぐりは帽子を冠っているけど、椎の実はスカートをはいてるわねえ、先生〟

ホラ、と実物を目の前につき出さて、椎の実がこんな外皮に包まれていることを知らなかっただけに、保育者にも新鮮な発見であった。外皮を脱ぎかけたものを〝スカートをはいてる〟とは何と適切な鋭い表現であろう。

枯枝を拾い集めて急造の炭をつくり、フライパンで、めいめいが拾い集めた椎の実を供出して炒る。炒る、皮をむく、食べる、この一連の作業を子どもたちは真剣に続ける。三歳の時には、落葉の中から椎の実を見つけだすことさえできなかった子が、四歳

の今は、割箸で一粒々々炒った椎の実をはさんで、友だちの掌にわけ入れている。一ヵ年の成長の姿である。秋の日はゆたかにこの子等の頬を照らし、ミレーの絵に見られるようなこの情景が、保育者の心を素朴にかえらせ、敬虔なものがすがすがしく心に流れてゆく。

水道の蛇口につけたホースを、すっぽりと砂の中に埋め、そのホースの先を土管につなげ、更にその土管から細い二本の土管に分岐させて水が流れ出るように工夫し、砂山の頂の湖らしいものに、その水を底から湧く泉のような仕掛で水を注ぎ入れる。これが四月に入園した男の子五、六人の、小半日の労作である。普通の池とちがい、底から噴出する仕掛なので水は濁らず、滾々と湧いて静かに溢れている。そこが苦心のしどころで、箱根の寮に合宿した時、船で渡った芦の湖の再現であろうか。大人の知恵の及ばない領域である。

東山魁夷画伯はその画集の中で

私は白い紙に向い合う。それは紙では無くて鏡である。その中には私の心が映っている。描くことは、心の映像を定着させようとする作業である。——

この紙を、子どもと置きかえて、そんな心意気で朝毎の幼稚園の門をくぐり度いものと念願している。（一九七四・一〇・二二）

山道　陵子

「あなたは、幼児保育者という人間芸術家である」倉橋先生は、このように述べているが、本当に私たちは幼児保育者として該当するだろうか。

時代も変わり、世の中も日に日にあわただしくなってきている。けれども、子どもの持っている本質的な子どもらしさ（芸術性）は、どんな時代においても普遍であると思う。この「子どもらしさ」を持っている子どもを、一瞬のうちに発見し、そしてさらに、うわべだけ子どもらしさを持った子どもと見分けることのできる幼児保育者であり、また、「うっとり」と酔えるような幼児保育者でありたいと思う。

それには、幼児保育者にしかなれなかった人ではなく、高いアンテナを持った、感受性豊かな、その上、知性も教養（常識）もあるすばらしい人にこそ幼児保育者になっていただきたいと思う。このように、優秀な人材が競って幼児保育者になりたがるような、そんな社会が一日も早く来るように、私たち幼児保育者が努力していかなければならない。

（お茶の水幼稚園）